

AIDSネットワーク横浜 ニュースレター

発行：特定非営利活動法人 AIDSネットワーク横浜

〒231-0015 横浜市中区尾上町 3-39 尾上町ビル 9 F

TEL：045-201-8808 fax：045-201-8809

ホームページ <http://www.netpro.ne.jp/any/>

e-mail：any@netpro.ne.jp



出前講座の報告 中野久恵（ANY運営委員）

卒業を控えた中学3年生への出前講座を行いました。2月28日は樽町中学校 3月1日は本郷中学校でした。ここでは、本郷中学校での講座を報告します。

「性・からだ・いのちの学習」と題して、①性って何だろう？②思春期のこと（男子の性&女子の性）③性感染症④関係性について話をしました。60分の中で盛りだくさんの内容です。

「性ってなんだろう？」と語りかけ、これから一緒に考えていくことを伝えます。

0.2ミリの受精卵が、子宮に着床してどのようにして生まれてきたのか、子宮の中での胎児のようすについて話していきます。胎児を自分に見立て、自分もそのようにして子宮の中で大きくなってきたことを伝えることが講座の導入になります。

からだの性・こころの性・表現する性・好きになる対象について説明します。4つの指標の組み合わせにより一人一人が違う特別な存在である、人の性は多様であり、自分もそのうちの一人と話します。

思春期におこる体の変化について、どれだけのことを知っているだろうか？悩んだり、自分の体の変化を肯定的に受け止められないことになって

いないか。自分はもとより異性の性についても知ること、は、「つきあう前」に必要なことです。

男子の性では、包茎、自慰、性器の形についての説明。女子の性では月経の周期の数え方、妊娠週数の数え方、おりもの（膣分泌液）について説明をします。

性感染症の説明のまとめとして「水の交換」を保健委員の協力のもとに行いました。8名中、7名が3回の水の交換でピンク色に変わりました。一目でわかるインパクトのあるワークショップでした。

最後に「関係性」について、教師による男子役、女子役のカップルのロールプレイの事例で「つきあうって、どういうこと」について一緒に考えます。生徒たちと共に学び合えた時間となりました。



第 15 回川崎STI研究会・・・参加報告 中野久恵

表記研究会が 3 月 16 日に開催され A N Y から 4 名が出席しました。

【講演 1】 S T I とセックスカウンセリング～H I V 感染、梅毒を含めて～

早乙女智子さん（公益財団法人ルイ・パストゥール医学研究センター文理融合型先端医科学研究室研究員）

豊富な情報のシャワーのような時間でした。性の健康はすべての人の課題である。S T I の恐れなしに性交できること、妊娠・人工妊娠中絶・出産・避妊・不妊・・・これらは、同等に扱われるべきである。個人的な感情論は不要である。すべての人は性的存在である。生殖的存在でなくても、性的存在でありうる。S O G I（性的指向と性自認の英語の頭文字をとったイニシャル言葉）の概念の紹介。現在、72 か国で、同性愛は罪であるとされている。

U N A I D S 差別ゼロデーでは、8 項目を掲げられている。1. 女性～パートナーの性的同意、幼児婚、D V、セクハラ、夫婦間レイプ 2. 薬物使用者～個人使用目的が犯罪 3. セックスワーカー 4. 同性間 5. トランスジェンダー 6. H I V 陽性者の診療拒否、渡航規制 7. 強制的 H I V 検査～妊婦、手術前検査 8. 若者～保護者の同意（中絶等）。この中で日本では 4. 同性間性行為 5. トランスジェンダーのみ O K となっている、他は達成されていない。

性の何が「恥ずかしい」のか、このことにどれほどの意味があるのか。性に対する偏見がある。「快楽」「愛情」「生殖」が重なり合う。セックスカウンセリングは性障害を扱う流れになっている。精神分析や行動療法、マリッジカウンセリングなどを活用する。セックスカウンセリングは重要である。高校の副読本に 22 歳が妊娠のピークであると書かれたが、18 歳～32 歳も 22 歳と変わらないことが分かっている。22 歳がピークなら

女性は大学に行かれないではないですか。快楽の性は、女性は挿入を伴うことでは不十分であると 1984 年に報告されている。

日本にないのは子どもの権利である。女子は自分の外性器を見ていない、触っていない、名称が分からない。オランダでは疑いのある行為があったらプレップが処方されている。

コンドームが守るもの、拒むものは何だろう。女性用のショーツ型のコンドームの紹介（イギリス製、9800 円）。日本では、緊急避妊薬について 2017 年の厚労省での議論では、医師の処方箋がなく薬局で購入できるのは時期尚早と見送られた。タイでは、22 バーツ（約 220 円）で、薬局で売られている。中絶手術は、日本は掻爬法が主流だが、世界では手動真空吸引法が主流である。

性の多様性をどう受け入れて医療をやっていくのか、課題である。オナニーは大切である。清潔に、自分と向き合う体験となる。性の行動の選択をするための学びが必要。ピアノは練習しないと先生の前で弾けないように、結婚したらできると思うのは間違い。（日本は）性のことに對してルーズである。



【講演2】わが国の性感染症の問題点

清田 浩さん（東京慈恵医科大学泌尿器科）

わが国の性感染症の問題点として、①性感染症予防を再考する②薬剤耐性の問題の2点について話された。

梅毒の感染者は、5811人（2018年）報告されている。（医師は全数報告の義務あり）

性感染症の予防を再考する

性感染症予防を行っているが情報の伝達に問題があるのではないかと。①若年層は、（予防についての記載がある）サイトに入っていくのだろうか、行政等が作成しているパンフレットを手に行っているのか、公開市民講座に参加するのか②テレビは見ない、新聞は読まない若年層は多い③若年層の情報伝達は、流動的である。その動向を把握するのは学会では限界である。④広告代理店などの参画が必要だが費用がかかる。国、都などからの費用の計上は難しい。

この問題に対して、厚労省のHIV研究班白坂先生の試みについて、佐賀大学の江口有一朗さんの報告が参考になる。①インターネットの履歴から高リスク群を把握する②高リスク群にバナー（垂れ幕の意味でWebサイトの広告やリンクの画像のこと）を配信する。③バナーを開くとメッセージがでる。④バナーの内容はポジティブな内容が開いてもらいやすい。⑤作成するには広告代理店のサポートが必要。費用をどうするのか。

次に学校教育の重要性について。①学校では、均等に情報を伝達できる。②そのためには、文科省、PTAの理解が必要だがハードルが高い。③

学会としては伝達内容を用意しておくことが求められている。

STIの蔓延防止について。★パートナーへの感染拡大防止は、北米（カナダ）におけるプロバイダーの役割が大きい。（プロバイダーとは、医師だけでなく研修等を受けた他の職種からも処方できる仕組みになっている）★手っ取り早い（Expedited）治療。ヘルスケアプロバイダーが行う。性的パートナーにSTIの診断なしに治療を行う。日本は、STI患者からパートナーに話し、パートナーが医療機関を受診、治療の手順である。（会場出席者から、患者名でパートナーの薬を処方することもあると発言）

薬剤耐性の問題

薬剤耐性についての問題の報告。各種の薬剤についての耐性の報告があった。患者によって薬剤耐性があるので効かないことがある。患者にそのことを説明しておかないと、クリニックの評判に関わることになる。効かなければ別の薬を処方する。STIの混合感染があるので、その処方もしている（静脈注射と内服薬）。



相談部会総会及び事例検討会報告

3月9日（土）13時より表記会議を行い、7名の出席がありました。2018年度の4月から2月までの概況について報告がありました。年度の前半の相談件数は少なかったが、後半になり、昨年並みの件数になっています。2月末までで90回の相談日に対して689件の相談がありました。女性からの相談件数が106件（15.5%）を占め過去最高となっています。MSMからの相談件数も増加しました。詳しくは、定期総会にて報告します。

相談部員7名とミニ・ワークショップを行いました。



テーマ1 : あなたが電話相談を続けている“元気のもと”は何ですか？

各自が付箋に書いていきます。1枚の付箋にひとつ書いて、いくつでも書いてくださいとお願いしました。それを発表し合いました。

- ・（話し相手の）不安はいわれなきことがほとんど。不安が軽くなって嬉しそうに「ありがとう」と、言われることが嬉しい。
- ・話していて相手が「理解できた」と納得してくれる嬉しさ。
- ・これまで続けられたのは、社会の動きに何らかの役に立っていたと思ったから。
- ・年を重ねて、感謝されることを味わう。
- ・少しでも自分の力を役立てている場所があり、嬉しいこと。
- ・社会貢献をできる範囲でしたい。
- ・仕事とのバランスを保っている範囲だから。
- ・無理のない範囲で入っている。
- ・過去に3回、入院・手術をしたが今は元気に旅行にも行けるので。

自分のためになっている

感謝されることが嬉しい／無理のない範囲で

社会・人とのつながり

- ・自分のため。
- ・自分の勉強になる。
- ・情けは人の為ならず。
- ・自分の勉強になっている。
- ・いろいろな方の相談の相手をする事で、自分の知識を整理したり、確実なものにできる。
- ・家にいても話し相手がいない。

- ・生の声が分かるから（社会が分かる）。
- ・ANYにかかわったことで知り合えた人たちがいる。
- ・HIV.AIDSのことに関連して他の事柄にも問題意識を持てる。
- ・新聞を読んでもAIDSを気に掛ける。

テーマ2：電話相談を続けてきたなかで、どんな良いことがおこりましたか？

- ・性に対する知識が広がったこと。
- ・H I V / A I D S についての知識・関心が高くなった。
- ・視野が広がった。
- ・家族が相談活動を認めていること。
- ・家の中でもH I V や性に関する話が話しやすくなったこと。
- ・友人や他の活動の中でも認めて相談してくる人がいること。
- ・私生活でも他人の話を聞いてあげられるようになった。
- ・忙しい中でも時間の管理、スケジュール管理ができる。
- ・知らない世界、想像もしないことをしている人たちがいることを知った。
- ・自分のことで深刻なことなどないように思い始めた。
- ・自分が不安がらないことの幸せを感じる。
- ・視野が広がった。異なった視点からの色々な見方に触れられる。
- ・知らなかったことがいかに多いかが分かる。人っていろいろだなあ。
- ・性行動や人の心理、感情などについて知ることができ、一緒に考えるようになった。

自分のこと

自分と他者
とのかかわり

- ・多くの人と知り合いになれる。
- ・シフトを組む相談員と会話するのも楽しい。(知識も得られるし、個人的な話もできる)
 - ・出前講座に活かせる。
- ・人々の生の声を聴くことができた。
- ・他の人からA I D S に詳しい人と認識された。
- ・災害があった時など(感染者は) どうしているのかなと気になるようになった。高齢者、身体障がい者だけでなく。

社会的資源

- ・生活が苦しくてもどこに相談すればよいか、公的サービス受けられるか判った。

短い時間のワークショップでしたが、皆さんからたくさんの事柄がでてきました。おおまかに分類をしました。電話相談を続けている“元気のもと”“どんな良いことがおこったか”について、お互いの感じていることを共有できた楽しいひと時でした。(中野久恵)

横浜AIDS市民活動センター(Y. A. A. I. C)の活動について スタッフの川島真理子さんにインタビューしました！

中野：ANYの中野です。きょうは、よろしくお願いします。この施設は、どこの運営なのですか？エイズと名前の付いた市民活動センターは日本ではほかにあるのですか？

横浜独自のエイズの啓発活動拠点

川島：横浜市から公益財団法人横浜YMCAが事業を受託して運営しています。日本ではほかに同様の施設はありません。

中野：そうですか、横浜市のエイズ対策への意気込みを感じますね。設立のいきさつなどを教えてください。

川島：1994年に横浜市で第10回国際エイズ学会が開催されました。その翌年の95年に設立されました。当時、国際エイズ学会への参加費は高額でした。多くの方にHIV・AIDSについて知ってほしいとNGOが主体になってフォーラムが開催されました。そのような市民活動の盛り上がりもあって設立されました。

中野：私も国際会議には参加できませんでしたが、パシフィコ横浜や展示ホール周辺での催し物に参加しました。それから、約20数年、Y. A. A. I. Cが横浜に存在してくださっていることが、私たち民間のボランティア団体にとっても心強く活動を支えていただいています。ありがとうございます。今の主な事業について教えてください。

主な事業は・・・世界エイズデー

川島：第一は、世界エイズデーのイベントです。参加してくださっているANY、神奈川県臨床検査技師



【YAAICの川島さん・・・ピンクシャツデーのイベントで】

会、アジアの女性と子どもネットワーク、SHIPの団体をはじめ当日参加のボランティアさんたちで新都市ホールの前で一日、市民への啓発活動を行ってきました。

中野：年末のあわただしい中ですが手ごたえを感じるのはどんな時ですか？

川島：若い方（10～20代）たちは、HIVや性についても「知っているよ」「防げるんだね」と会話をしてくれます。学校などで情報を得ているように感じます。でも、30～40代の方は、なかなかパンフレットを受け取っていただけないことがあります。

中野：そうですか、年齢層による違いがあるのですね。一日にどれくらいの方にパンフレットをお渡しできているのですか？

川島：パンフレットは少なくとも 1000 人には渡せています。クイズラリーで展示ブースに立ち寄ってくださる方もいますので、この一日での啓発活動には大きな意義を感じています。

中野：12 月 1 日は「世界エイズデー」ですがマスコミの報道が少ないのが残念ですが、対面での啓発活動を地道に行いたいですね。

川島：そう思います。

中野：そのほかの活動について教えてください。

啓発活動・・・情報誌おーぷんの発行

川島：情報誌“おーぷん”を年に 4 回発行しています。市内の小学校・中学校、県内の県立高校、私立高校、市内の大学の保健センター、市内の医療系、保育系、教育系の専門学校に配布しています。1 回の発行で約 5000 部を届けています。

中野：すごい！たくさんですね。反応はいかがですか。

川島：AIDS 文化フォーラムでお会いする方から、「おーぷんの情報で来ました」とか「いつも掲示して生徒に読んでもらえるようにしています」「増刷して生徒に渡している」とかの声をいただきます。

中野：それは嬉しいですね。記事の内容で工夫されていることなどありましたら教えてください。

川島：エイズや性感染症の情報はもとよりですが、そのバックグラウンドをていねいに伝えたいと思います。性感染症を伝えるには、セクシュアリティやからだのことは欠かせないと思います。また、性感染症は、人と人とのあいだに起こります。人と人のつながりには、“いい感じ”のつきあいもあれば、レイプなどの“悪い感じ（暴力の性）”の関係性もあります。性行動の前に関係性についての情報も伝えたいと思います。また、SNS（LINE やゲーム）で知り合った人と実際に会う中で事件に巻き込まれている子ども・若者がいます。大きな課題だと感じています。

中野：それは、本当にそうですね。私も危機感を抱いています。

川島：その他には、メールマガジンで情報を発信しています。「まぐまぐ」(<http://www.mag.com/>)から入ると読める、「週刊★STI」は携帯向けに毎週金曜日に配信しています。「おーぷん」はパソコン向けに毎月 20 日に配信しています。いずれも登録が必要です。

中野：さまざまな角度から情報を発信しているのですね。これからの展望と言いますか、こうなったらいいなと思うことを教えてください。

川島：もっと、皆さんに活用してもらいたいです。会議スペースもありますので研修場所としての活用、書籍や教材用のビデオなども豊富にありますので利用していただきたいです。

中野：本当にそうですね。私もここ来ると新刊本に出合ったり、情報もいただけるので来るのが楽しみです。お忙しい中を本日はありがとうございました。

横浜AIDS市民活動センター

◆所在地 横浜市中区尾上町 3-39 尾上町ビル 9 階

電話：045-650-5421 FAX：045-650-5422

◆開館時間

平日 13 時～20 時

土・祝 10 時～17 時



*火・日は休館 *毎週火曜にHIV・エイズ
夜間検査（無料・匿名）を実施しています。受付
時間：18 時～19 時 30 分*年末年始休館：12 月 2
8 日～1 月 4 日*夏季休暇：8 月 13 日～8 月 17 日

読んでみませんか？

【書名】

暴力を受けていい人はひとりもない

CAP（子どもへの暴力防止）とデートDV予防ワークショップで出会った子どもたちが教えてくれたこと

【著者】阿部真紀

（認定NPO法人エンパワメントかながわ理事長）



思い起こせば20数年前、私の勤務する小学校にCAPプログラムのワークショップをお願いしたことが阿部さんとの出会いでした。当時は、CAPプログラムが日本に導入された初期の頃だったと思います。権利という言葉がなじみにくい状況を、「安心、自信、自由」という分かりやすい言葉でアクションをつけてのお話などに私自身が学んだことを思い出します。

本書は、3章からなり、1章：CAP（子どもへの暴力防止）のなかで学んだ子どもたちの力／2章：暴力を受けずに生きる権利～デートDV予防活動で伝えたいこと／3章：Personal is political（個人的なことは政治的なこと）を胸に刻んで／からなっています。

CAP（キャップ）とは、Child Assault Prevention（子どもへの暴力防止）という英語の頭文字をとったもので、アメリカで作られたプログラムです。日本には森田ゆりさんが紹介しました。1章では実際に学校で行っているようすが紹介されています。「いじめられていい人はひとりもない」「なっちゃんいけな気持ちはない」など子どもとのやり取りが丁寧で家庭での子どもとの対応にもたくさんのヒントがあります。

2009年から5カ年計画で神奈川県との協働事業「デートDV（恋人間の暴力）防止のためのシステム構築事業」を始めています。実際に高校に行ってワークショップを行うことで見えてくる子どもたちの実態から出発した行動です。そこに至る行動力には敬服します。

デートDVについて専門機関はなくてもデートDVに関わる専門機関は存在するので、それぞれの専門機関と学校現場に顔の見える関係を作りたいと働きかけをします。県内の9つの機関に呼びかけ検討委員会を発足するのですが当初はお役所の縦割りで、対応について相談すると「それはできません」との回答が続いたようです。その後、実際に高校の養護教諭が事例を報告し、「この事例はスタンダードなパターンです」と話してから一気に前進したようです。

2016年から「デートDV防止全国ネットワーク」の設立に奔走し、昨年12月に設立が実現し大きく報道されました。今まさに輝き、「個人的なことは政治的なこと」を信念として頑張っている阿部さんの著書に出合えてうれしかった私です。（中野久恵）

